埋文ふじのみや

MAIBUN Vol.12

絹本著色 富士山曼荼羅図（重要文化財） 16 世紀・富士山本宮浅間大社蔵

2013 年に富士山が世界遺産に登録され、その構成資産のひとつとなった浅間大社。今号では、富士山信仰の本拠地であった浅間大社遺跡を中心にご紹介します。図らずも増えたおうち時間にこの『埋文ふじのみや』をお供にして、馴染み深い“お浅間さん”の歴史に触れていただければ幸いです。

2021. 春
富士宮市埋蔵文化財センター

平安～江戸時代

Sengentaisha

浅間大社遺跡

せんげんたいしゃいせき

富士宮市宮町

調査年／
1994 年・1995 年
2002–2005 年
2007 年・2012 年
2015 年

富士山信仰の本拠地

浅間大社遺跡は、新富士の旧期溶岩である大宮溶岩流で形作られた丘陵と潤井川が作り出した沖積地の境目、標高 120m 地点に位置する浅間大社を中心とした遺跡です。境内には、江戸時代初めに建てられた本殿や拝殿を中心に、楼門や回廊、鳥居が建ち並び、参道があります。境内の後ろには小高い丘があり、地形は大きく変わります。そこを起点として富士山への登山道が作られました。境内の東側には、溶岩流の先端部から湧き出た富士山の自然湧水である湧玉池（わくたまいけ）があり、そこを源流とする神田川が南に向かって流れています。

室町時代の後半に描かれた『絹本著色富士曼荼羅図（けんぽんちゃくしょくふじまんだらず）』には、社殿や湧玉池で水浴びをする行者などで賑わっている様子が描かれています。戦国時代に焼打ちにあいましたが、江戸時代に徳川家康の命令によって、建物の復旧がされ、現在の境内の景観になりました。遺跡内では、過去に9回を数える発掘調査を行っており、様々な成果が得られました。まず、参道の東側で堀と井戸が見つかりました。堀は幅約4～6m、深さ約 1.2mと大規模で、北西から南東方向に蛇行し、東側を流れる神田川へ合流するものでした。

南側部分では、大きさ 30 ～ 50cm 大の石を2・3段積み上げた石組で構成された堰があり、排水溝としての役割を果たしていたことが分かります。出土遺物は 12 世紀前半のものから 19 世紀のものまで幅広く、長期間にわたって利用されていました。しかし、浅間大社の境内地を描いたと伝わる江戸時代の絵図には、鏡池から神田川に注ぐ水路は描かれていますが、この大型の堀は描かれていません。堀の東側で見つかった井戸跡は、検出幅 125cm×80cm、深さ 122cm で、井戸枠内から漆椀が出土しました。参道西側では中世と思われる石敷遺構や土坑が見つかっています。社殿西側の回廊外側の調査では、竪穴建物が検出されました。隅が丸く、長軸 4.22m、短軸 3.85mの方形で、柱の穴は2基検出されました。また、掘立柱建物が確認され、1間×1間の柱穴の間は 2.1 ～ 2.25mです。いずれの建物跡も、12 世紀前半頃に建てられたものとなっています。

報告書／『浅間大社遺跡』1996 年
『浅間大社遺跡Ⅱ』2003 年
『富士宮市の遺跡Ⅲ』2005 年
『富士宮市の遺跡Ⅳ』2008 年
『浅間大社遺跡Ⅲ』2013 年

湧玉池

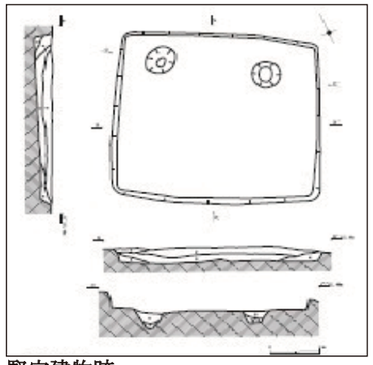
社殿

調査で見つかった遺物は、山茶碗やカワラケ、国産陶器、貿易陶磁器など中世の遺物が豊富にみられます。このうちカワラケが全体の9割以上を占めており、底に高い高台が付く足高高台や、高台が柱状に高くなっている柱状高台など特徴的な形のものが多く見られました。これらは神社で行われた神事に使われたと推定されています。カワラケは、基本的にはロクロを使って作られていますが、ロクロを使わない「手づくね成形」と言われるものがあり、その中には白い色をしたカワラケも確認できます。これらは、御神酒のためのお碗や明かりをつける灯明皿として使われていたと考えられます。富士山信仰の祭祀に関わるものなのでしょう。国内で作られた陶器は、現在の愛知県・岐阜県で生産された瀬戸美濃製品や愛知県の知多半島で作られた常滑製品と呼ばれる陶器類が多く見られます。中国や朝鮮半島などの海外で作られた焼き物である貿易陶磁器は、緑色の青磁や、白色をした白磁、青色顔料で絵を描いた青花等が見られます。お碗やお皿等日常品が多いですが、持っている者の権力を表す「威信財」（ステータスシンボル）である盤、四耳壷、梅瓶、天目なども出土しており、浅間大社の格の高さをよく表しています。

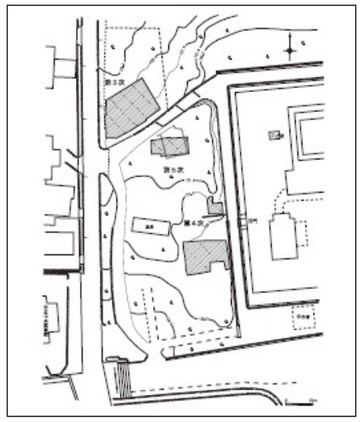
境内東側に所在する湧玉池は、土砂の浚渫作業に伴って遺物の回収を行いました。湧玉池は富士山信仰の行者が水垢離を行い、身を清める場として利用されたことが『絹本著色 富士曼荼羅図』等の絵図から窺えます。回収されたものは、中近世の焼き物や銭、煙管や砥石、釘、泥面子といった様々なものが見られました。

調査風景

堅穴建物跡


堅穴建物跡

土器の出土状況


調査区（1994・1995 年）

出土土器・陶磁器・漆器類

平安時代

Ushigasawa

牛ヶ沢遺跡

うしがさわいせき

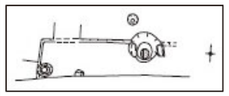
富士宮市大中里

調査年 /2006 年

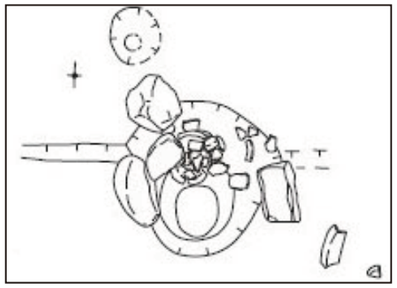
古代の竈（かまど）跡

牛ヶ沢遺跡は、羽鮒丘陵東側の裾部にある丘陵に所在しています。この付近には、富士川河口断層帯が通っており、その活動の跡を調べる際に、発掘調査を行いました。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡が1軒見つかり、その住居跡に設けられていた竈の跡が発見されました。この時期の竈は、地面を掘り窪めて土器を据え、その周りを支柱石で固定して煮炊きする構造でした。竈には2個の支柱石の他に炭化物も残っており、当時の人々が日常的な生活を行なっていたムラがあったことが明確にわかります。

報告書／『富士宮市の遺跡Ⅳ』2008 年



住居跡（写真・図）



カマド

坏（手前）と甕（奥）

学芸員の連載コラム

考古学への招待

渡井英誉
富士宮市埋蔵文化財センター学芸員

遺跡から富士宮の原始・古代を考える

邪馬台国時代の富士宮

大型壺の生産と交流

子供の身の丈もある大きな壺が2世紀の後半に登場します。壺の入口（縁）を厚くする点を大きな特徴としていることから容易にそれと分かるものです。土器を形作る粘土の種類などからその産地を考えてみようとする研究が進んでいます。粘土の中には、天城山に関わる白い火山灰を混ぜており、その特徴から、狩野川流域にあたる三島市周辺で作られたものではないか考えてられ、その大型壺の生産には、特定の地域が関わったのではないかと言えるのです。そして、大型壺の全国各地への配布へとつながるのです。

すでに示しておきましたが、邪馬台国時代の前夜にあたる弥生時代の終わりごろになると富士山周辺に小国とも呼べそうな、共通の土器を使うまとまりができます。それが発展的に古墳時代へ移るころにこの大型壺が登場するのです。このような国の形成を推し進めたのが、高尾山古墳や清水にある神明山古墳に葬られた人ではないでしょうか。

高尾山古墳

東駿河地域で高尾山古墳より前に登場する富士宮にある丸ヶ谷戸遺跡で発見された墳墓に関わる首長は、どの程度の権力を持っていたのでしょうか。富士宮あるいは富士山西南麓の邪馬台国時代を考える上で最も重要な視点となります。

死後、古墳に納められた首長がその生産に関わったと思われる大型壺は、物品を運ぶコンテナとしての機能も考えられていますが、ここでは、土器自体が持つ特別な意味（威信財）を重視しようと思います。そして、広く各地へ広がり、それぞれの地域でそのイミテーション（模造品）が作られるようになるのです。東日本においては、太平洋沿岸地域を仙台平野まで至ります。それは、古墳時代を表す前方後円墳の分布範囲に相当するものとなっています。

植出遺跡（沼津）大型壺

次号の案内

富士宮市内で見つかった遺跡

中世の遺跡

浅間大社遺跡に続き、次回は大宮城跡が登場。大宮小学校を中心とした遺跡で、5回に分けて行われた発掘調査ではさまざまな遺物が発見されました。出土した多種多様な遺物の迫力ある写真もご紹介します。

※新型コロナウイルス感染拡大防止対策により、様々なイベントの予定が立たないため「富士宮市の見どころ案内」をお休みします。

富士宮市埋蔵文化財センター

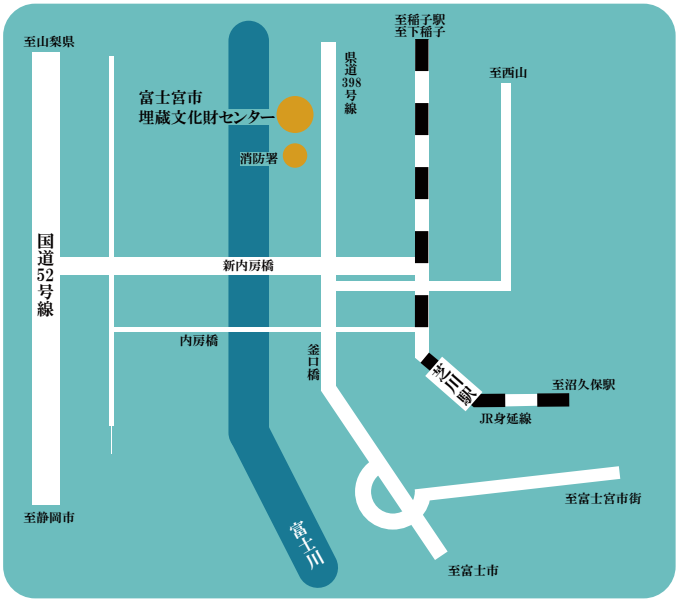
ご利用案内

所在地　〒419-0315
静岡県富士宮市長貫 747-1
電話　0544-65-5151
FAX　0544-65-2933
E-mail　maibun_center@city.fujinomiya.lg.jp

展示室
開館日　平日
* 祝日及び年末年始（12 月 28 日～ 1 月 3 日）は休館
開館時間　9:00 ～ 17:00（入館は 16:30 まで）
* 埋蔵文化財センターの業務時間は 8:30 ～ 17:15

見学料　無料
駐車場　あり（無料）

交通案内



【バックナンバーのご紹介】

これまでに発行された『埋文ふじのみや』vol.1～ vol.11 は、富士宮市のホームページでご覧になれます。合わせて、最新号も公開しています。

富士宮市埋蔵文化財センターだより
埋文ふじのみや Vol.12
令和３年３月
編集／発行　富士宮市埋蔵文化財センター